

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：36302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17336

研究課題名（和文）犯罪少年の内観療法後の追跡および効果検証

研究課題名（英文）The follow-up investigation and inspection of criminal juveniles after Naikan therapy

研究代表者

田村 優佳 (Tamura, Yuka)

聖カタリナ大学・人間健康福祉学部・助教

研究者番号：70627463

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：粗暴的な行動歴をもつ思春期の少年たちにどこまで集中内観がふみこめるのか、ローゼンツァイクの提唱するP-Fスタディ（Picture Frustration Study, 絵画欲求不満テスト）を用いて検証した。その結果、直後から攻撃性が抑制され、他者に対する共感性を育むといった効果が表れはじめた。個々が抱える課題解決に向けた効果が期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究では、成人を対象にした内観療法による研究は報告されているが、対象を非行少年とした集中内観の効果検証は少ない。そのため、集中内観を実施した非行少年が、実施前後でどのような変化を示すか、さらに、少年個々の心理検査の結果等のデータを分析することにより、エビデンスを創出することの意義は大きいと考えられる。また、対象少年の理解度に応じた投影法や最近注目されているレジリエンスに関するツールを使用するなどして、心理的变化を測定し、考察する。

研究成果の概要（英文）：To effectively evaluate the depth of self-observation, we suggest that it is necessary to consider and comprehend the different patterns of thinking induced in subjects by exposure to the Rosenzweig Picture Frustration Study. For adolescent juveniles with a violent nature and ordinary behavioral problems, Shuchu Naikan therapy may be a sustainable method for controlling extraggression and fostering empathy.

研究分野：臨床心理学

キーワード：非行少年の内観 心理査定 攻撃性の抑制 共感性を育む

様式 C-19, F-19-1, Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国における内観療法の効果は、1950年代後半よりエビデンスが発表されてきた。定量的な側面は、再犯率に関する調査が古くから行われており、所定期間内刑務所7施設の合算したデータとして、再入率が内観群18%に対して非内観群31%との結果が報告されている(武田良二, 1972)。再犯の防止に対し、内観療法が関与していることを示唆するものであった。また、心理検査を用いた研究(SCT, PFスタディ, TATなど)や、事例研究は、1970年代初頭に多く行われてきた(三木善彦, 1972)。

矯正施設に初めて内観療法が導入された1954年以降、内観療法の有用性が示されていく中、内観療法は全国的な広がりを見せて普及した。一方、認知行動療法が効果をあげていき、やがて、矯正処遇法としての内観療法は下火になった。それでも、「矯正施設での内観療法の効果はある」という意見が消えることはなかった。

近年は、処遇技法としての内観療法の効果検証はほとんど例がなく、集中内観にかかるエビデンスを創出することの意義は大きいと考えられた。また、先行研究では、成人を対象にした内観療法による研究は報告されているが、対象を非行少年とした集中内観の効果検証は少ないことから、非行臨床における内観療法について疑問が残されており、より詳細な研究が必要であると考えられた。そのような中で、5年前、伝統的に集中内観を実施している非行少年の立ち直りを支援するある施設において、連携が可能ということで、研究を開始した。

2. 研究の目的

先行研究では、成人を対象にした内観療法による研究は報告されているが、対象を非行少年とした集中内観の効果検証は少ない。そのため、集中内観を実施した非行少年が、実施前後でどのような変化を示すか、さらに、少年個々の心理検査の結果等のデータを分析することにより、エビデンスを創出することの意義は大きいと考えられる。また、対象少年の理解度に応じた投影法や最近注目されているレジリエンスに関するツールを使用するなどして、心理的变化を測定し、考察する。

3. 研究の方法

(1)集中内観の実施について

内観療法は、吉本伊信によって開発された自己観察による人格変化法であり、通常1週間の社会環境からの遮断を行う集中内観と、日常生活の中で数時間行う日常内観に分けられる。集中内観は、内観者が一人屏風の中に座り、自分の内面に眼を向けテーマについて考える。テーマは、母親から始め身近な近親者に対して、幼少期から年代順に現在まで、「してもらったこと」「して返したこと」「迷惑をかけたこと」を思い出していき、日常刺激や対人関係から離脱し、徹底して自己を観察して知るよう努力する。集中内観は、内観者と指導者による一対一の面接が重要である。

内観者(本研究の対象者)は、「かっとなって」器物を壊したり、他人に暴力をふるったこと等により、施設に収容された非行少年である。当該施設における集中内観は、教育の一環として計画的に実施されているところであり、強制的処罰の意味合いをもったものではない。面接は、内観に関し知見を有する当該施設職員が午前と午後の2回以上行う。面接の基本姿勢は、内観者の考えや行動の受容であり、「この時間、だれに対するいつごろの自分を調べましたか」といった形で話を聞く姿勢に徹する。

(2)分析方法

P-Fスタディ(青年用)等の心理検査及び面接調査のタイミングは、集中内観前後の変化をみるため、「集中内観前」(約1~2週間前)、「集中内観直後」(実施後1週間以内)、集中内観の効果の持続性を調査するため、「集中内観1か月後」(実施1か月後)の3回とした。

1 P-Fスタディ(Picture Frustration Study)

P-Fスタディは、古くから内観の評価において用いられてきた。先行研究では、内観群では他責的反応が減少し、自責および無責反応が増加することが報告されてきた。しかし、実施数か月経過後の調査では、他責反応が再び増加傾向になる、また、欲求不満の原因を向ける方向は変化した、標準値ではないことから適応上の困難さは変わらないなどの報告がなされている(三木善彦, 1972)。本研究は、先行研究を踏まえ、反応の質の変化とそれは適応上望ましい変化であるかどうかについて検討した。特に、「自我防衛」の類型に注目した。自我防衛は、欲求不満場面において、他者または自分自身を直接攻撃、非難することによって直接ストレスの解消を図る反応である。

2 動物家族画

動物のサンプル図版(幼児の学習素材館どうぶつ)を提示し、「動物の家族の絵を描いてください」と指示した。絵が完成した後に、「家族のメンバーを教えてください」「何をしているところですか」等と質問した。

3 ロールシャッハテスト

被験者の負担を減らすため、ロールシャッハ10枚全ての図版を実施せずに、辻(辻悟, 1997)が輻輳カードと提唱するII, VI, IXの3図版を使用した。分析は、辻の提唱する対象物の把握様式(未分化, 分析的, 総合的の3段階)から行った。

4 リスク・レジリエンススケール

非行に係るリスク要因とレジリエンス要因について、その程度を測定することを目的に作成された質問紙である。レジリエンスは、悪い状態からの回復力を示す概念である。使用について、開発した千葉少年鑑別所及び佛教大学の近藤日出夫氏の許可を得た。

尚、連携研究者の加藤匡宏医師（愛媛大学教育学部准教授）、研究協力者の久保慎一臨床心理士・公認心理師はスーパービジョンを実施することができ、質的データを扱う研究体制に問題はない。

4. 研究成果

2015年から現在まで、対象を非行少年とした集中内観の効果検証を実施した。P-F スタディ、動物家族画、ロールシャッハテスト、内観肯定度、父母への発信回数、非行リスク得点、レジリエンス得点、それらデータを使用して研究活動を行った申請者の直近5年分の成果を記す。

(1) 動物家族画、リスク・レジリエンススケールに表れる内観直後の効果について

3名の集中内観前後の変化を動物家族画、リスク・レジリエンススケールを用いて分析した。その結果、家族との関係の態様が違う3名ともに、家族イメージの向上が見られると同時に、自己イメージの向上や対人不信感の緩和など、個々が抱える課題解決に向けた期待される効果が見られた。家族をテーマにした内観療法は、他者への情緒的つながりを回復する手助けになるものと考えられる。

(2) 自己顕示から自己開示への切り替えが可能となった事例について

A少年は、はじめは、自分の本音や感情に蓋をしたり、距離を置いたりする傾向が見受けられた。集中内観をすることで、直後から自己の感情を表出して、過去のことを反省するような言動が見られ始めた。A少年の事例の観察から、集中内観を導入した場合、非行少年が自然な形で自己の感情を表出して、結果的に内省を促す有効な手法となり得ると考えた。

(3) 対象物の把握様式と内観の深さとの関連について

内観者が現実や内面を適切に捉え、洞察する能力の違いによって、内観の深まりに差があると考えられる。内観の深まりについて、吉本は、評点基準を作成しているが、主観が入りやすいため使用するには、高い専門性が必要とされることが指摘されている（佐藤幸治, 1972）。そこで本研究は、吉本の提唱する「内観の深さ」について取り上げて、心理臨床家が使用する心理アセスメント法により明確化することを試みたところ、ロールシャッハテスト図版の把握様式において、未分化全体反応、部分反応（初期集約）、統合性全体反応の順で、内観の内容や対象が具体化した。本研究で得られた結果により、内観が浅い段階に留まりやすい者は、対象物の把握様式に起因していることが示唆された。

(4) P-F スタディに表れる内観直後の4効果

P-F スタディに表れる内観直後の主要な効果は、次の4点に集約される。

- 1 他罰性を自主的、自律的に統制する力が強化され、攻撃性を抑制する態度が深まる。
- 2 他人の事情への配慮、気遣い、思いやり、共感性が付加されて、感謝の念が深まる。
- 3 できるだけ感情的にならずに、きちんと正確に自分の意思を伝えようとする気持ちが高まり、相手を非難していた場面でも、寛容さや待つ態度を示す。
- 4 事態に距離を置いたり、表面的に対応していたのが、具体的、現実的に物事を考え、真摯な態度で、主体的に問題対応を図ろうとする姿勢が強まる。

他者を非難・攻撃する反応は、内観後に著しく減少する（三木善彦, 1972）との報告があるが、攻撃性の抑制だけにとどまらず、冷静な態度での意思表示欲求の高まりや、主体的な問題対応姿勢といった複数の要素が、集中内観法の効果として考えられる。多重効果によって、内観直後の変化も著しいものになると思われる。

(5) P-F スタディのタイプ別の変化

自我防衛型の類型別による事例から、集中内観の直後はどの類型も共通して、攻撃性の抑制、冷静な態度での意思表示欲求の高まり、主体的な問題対応姿勢の喚起といった変化がみられた。集中内観1か月後には、他罰反応（E）が平均より高くなる者については、効果が持続しづらいことや退行する事例があった。無罰反応（M）の高い者は、回避的抑圧的傾向もあることから、気が大きくなったり、猜疑心が強まるといった事例が見られた。自罰反応（I）の高い者は、少なくとも1か月は他の類型と比較して効果が持続した。このように自我防衛型の3つのタイプの違いによって変化が見られ、集中内観後の効果の持続性についても類型ごとの違いがあるものと考えられる。

考察

①内観療法を肯定的に捉えていたグループとそうでないグループ別による内観実施前後の父母への発信回数、家族関係を検討した。また、②非行・犯罪リスクに影響を及ぼすと考えられる家族イメージや自己中心性など内観実施前後の心理的变化について明らかにした。③PF スタディの内観前の主要反応（第1反応）により、他罰（記号E）、自罰（記号I）、無罰（記号M）の3つの反応が特徴的な事例について、タイプ別の効果や効果の持続性を検討した。①②③の結果から、対象を非行少年とした集中内観療法は効果があること、ただし、効果の持続の観点からは、抑制や統制する力が弱く葛藤を内面で抱え続けることができにくい者や過剰適応気味の者では、日常内観のような継続的なサポートや、ロールプレイやソーシャルスキルトレーニング等の他

の技法を組み合わせる実施することが必要となることを事例研究から考察した。また、対象少年の多くは、1週間の内観後、「イライラすることが減った」「落ち着いてきたと言われる」「嫌な思い出ばかりだと思っていたけどそうではなかった」「やってよかった」という感想を述べていた。少年個々の心理検査の結果等のデータでは、様々な変化が見られているが、本人には情緒的安定が最も自覚されやすいことが示唆された。

論文

1. 素行不良傾向を示す少年の他罰性に対する集中内観の効果—P-F スタディ所見の事例報告— (田村優佳・北山整・久保慎一・加藤匡宏) 内観研究, 25(1), 55-64, 2019.
2. 内観療法の个体差と発達的变化—投影法を用いた検討 (田村優佳・久保慎一・加藤匡宏) 内観研究, 23(1), 71-77, 2017.
3. 家庭内葛藤により自己顕示性が強い在院者の集中内観後の変化 (田村優佳・加藤匡宏・椎葉健志) 矯正教育研究, 62, 116-121, 2017.
4. 集中内観法による少年院在院者の変化に関する考察 (田村優佳・加藤匡宏・宇治田直樹・川本昇平) 矯正教育研究, 61, 113-121, 2016.

学会発表

1. 事例から考える集中内観の効果と課題 (田村優佳・北山整) 第55回日本矯正教育学会, 東京, 2019年10月8日(火)
2. 年少者に対する集中内観の事例研究—統制力と攻撃的感情に重きをおいた考察— (田村優佳) 第42回日本内観学会, 長崎, 2019年7月14日(日)
3. 内観の深さについて—把握様式からの考察— (田村優佳・久保慎一・加藤匡宏) 第38回日本心理臨床学会, 横浜, 2019年6月7日(金)
4. 処遇技法の効果検証に関する一考察—内観法の質的・量的研究— (川本昇平・戸塚智史・宇治田直樹・田村優佳・加藤匡宏) 第51回日本矯正教育学会, 東京, 2015年9月29日(火)

<引用文献>

- ・ 吉本伊信 1972 内観の方法と実践 奥村二吉・佐藤幸治・山本晴雄(編) 『内観療法』 医学書院 P23-39
- ・ 佐藤幸治 1972 『禅的療法・内観法』 文光堂 P213-217
- ・ 武田良二 1972 内観法 財団法人矯正協会編『矯正処遇技法ガイドブック第1分冊』 矯正協会 P146-167
- ・ 辻悟 1997 『ロールシャッハ検査法 形式・構造解析に基づく解釈の理論と実際』 金子書房
- ・ 三木善彦 1972 内観の効果 奥村二吉・佐藤幸治・山本晴雄(編) 『内観療法』 医学書院 P121-143

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田村優佳, 北山整, 久保慎一, 加藤匡宏	4. 巻 25(1)
2. 論文標題 素行不良傾向を示す少年の他罰性に対する集中内観の効果 P-Fスタディ所見の事例報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 内観研究	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村優佳, 久保慎一, 加藤匡宏	4. 巻 23
2. 論文標題 内観療法の個体差と発達の変化 投影法を用いた検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 内観研究	6. 最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村優佳, 加藤匡宏, 椎葉健志	4. 巻 62
2. 論文標題 家庭内葛藤により自己顕示性が強い在院者の集中内観後の変化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 矯正教育研究	6. 最初と最後の頁 116-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田村優佳
2. 発表標題 年少者に対する集中内観の事例研究 統制力と攻撃的感情に重きをおいた考察
3. 学会等名 第42回日本内観学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村優佳・北山整
2. 発表標題 事例から考える集中内観の効果と課題
3. 学会等名 第55回日本矯正教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村優佳・久保慎一・加藤匡宏
2. 発表標題 内観の深さについて-把握様式からの考察-
3. 学会等名 日本心理臨床学会第38回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	加藤 匡宏 (Kato Tadahiro) (60325363)	愛媛大学・教育学部・准教授 (16301)	